

すなやま・けんいち

株式会社ゆう建築設計代表取締役。建築設計と企画を一体的に行う「建築企画」のパイオニア。関西を中心に80を超える医療・介護施設の設計を手がけ、近年では医療法人等を対象とした高齢者住宅事業のセミナーを各地で開催している。1972年、SANT-LUC DE TOURNAI 建築学校(ベルギー)留学。75年、京都大学工学部建築系学科修士課程修了。81年、ゆう建築設計設立。著書に、「医療・介護・建築関係者のための高齢者の住まい事業企画の手引き」(学芸出版社)等
http://www.eusekai.co.jp/
E-mail:sunayama@eusekai.co.jp

競争力強化を果たす居宅介護事業所の建築

モノ



認知症対応型デイサービスの建築的工夫

砂山憲一 株式会社ゆう建築設計代表取締役

「認知症の方がご自宅に住み続けるために、認知症対応型デイサービスは重要な役割を果たしています。一般的なデイと認知症対応型デイの介護内容の違いを、実際に介護にあたっていらっしゃる方からヒアリングすると左記のような話が聞きました。

- 落ち着きのない方には職員が横について対応
- 帰宅要求の強い方には車に乗ってもらい近所を回る
- 集団レクリエーションになじめない方がいる
- なじみの職員がそれぞれの方に対応することが大事

利用者への接し方は、一般デイと認知症対応型デイではかなり違いがあることがわかります。しかし、建物の内容はそれほど大きな違いはなく、当社で設計した認知症対応型デイサービスの建物は、一般デイと建築的には変わりありません。認知症対応型デイのハード整備はどのように考えればよいのでしょうか。

筆者は建築設計を始めた頃から、認知症の方が利用される建物の設計についてずっと悩んできました。認知症の方は、以前は「痴呆」と呼ばれ、その後「認知症」という言葉に変わっていきましたが、建築を設計する立場からはどのような住まいを提供すればよいか確信が持てませんでした。

30年ぐらい前に特養を設計する機会があり、認知症の方に入っていた部屋は「他の部屋とは違うものになるだろう」ということで特養の運営者と随分議論をしました。

当時は認知症に対する情報も少なく手探り状態でしたが、「入居者の住まいにできるだけ近いものが良いだろう」と畳の部屋にしました。また、便を壁にこすりつけたりする方もおり、掃除のしやすい内装材ということもテーマでした。

しかし、畳の部屋も数年後には使えにくいということで、ベッドの部屋に改修され、認知症の方にとって良い部屋とはどのようなものか、はつきりしないままの状態が何年か続きました。そのようななかで1つの道筋が見えたのがジョン・トゥース氏との出会いでした。

アダーズ・ナーシングホーム

アダーズ・ナーシングホームは



写真1 取手のないドア。ドアチェックが見えている



写真2 白いところがスタッフ用、木目のところが入居者用

れできる部分に分け、スタッフ用の戸棚は取手をつけず、材料も壁と同じにしています(写真2)。

③自由に歩き回れる工夫
行き止まりをなくすることが重要で、庭にも自由に出られて、かつ自然に帰ってこられるような計画になっています。

同施設では、内装材などにもさまざまな検討が行われ、選択されています。

□ 便所の床材はビニール長尺シートを使い、壁に巻き上げ施工。衛生的であると同時に掃除をしやすくし、スタッフの手間がかららないようにするため

□ リビングやダイニングは音を考慮し防音性のカーペットを使用。外国では靴をはくため、歩く音に気を遣っている。大きな音に耐えられない利用者があるため

オーストラリアのタスマニア島にあり、精神科医のジョン・トゥース氏が中心となって計画されました。同施設の理念は「歩行可能な重度の認知症高齢者が、ごく普通の家庭で暮らすような生活を送ること。誰でも、どこでも、何でもできること。安全で幸せでストレスのない生活を送れること」です。

- そのため、建築設計にも工夫が凝らされており、その基本姿勢は次のとおりです。
- 自分がそれまで住んでいた家庭に近い住まいであること
- 料理や家事など、普通の家庭で行われることができること
- 入居者は自分だけの個室を持ち、自分の持ち物や使い慣れた家具を使用できること

□ 長年慣れた生活のリズムに、できる限り合わせた生活スケジュールで暮らせること

また入居者だけでなく、働くスタッフも「ハッピー」である設計が求められました。同施設で働くスタッフにストレスがあると、入居者がスタッフのストレスを感じてしまい、問題行動が起こるとの理由からです。

また、建築設計者の立場からみ

このようなアダーズ・ナーシングホームで使われている建築の工夫がどこまで適用されるのが良いかについては議論があるところですが、ただし、家庭に近い施設というコンセプトは適用されるべきだと思います。

今後、認知症対応型デイサービスを設計する機会があれば、この点を徹底的に追求したいと考えています。

普通の生活を

ジョン・トゥース医師がわれわれに語った次の言葉が、今も認知症の施設を設計するときの指針になっています。

「生活から危険をなくすることはできない。でも、できるだけ普通に、安全に、幸せに認知症高齢者が暮らせることを考えていきたい。設計者は、そこに暮らす人々の普通の生活を常に考えてほしい。イマジネーションを働かせ、どんなことをすればより良くなるかを心がけてほしい」

アダーズ・ナーシングホームについては、ゆう設計ホームページ「時読本 No.12」を参照ください。
(http://www.eusekai.co.jp/index.html)